

学生の発想を応援

秋田大のものづくり創造工学センター（神谷修センター長）は本年度から、学生自らが考えたプロジェクトを支援する制度を始めた。学生たちが事業を申請、教授陣の前でプレゼンテ

ションを行い、認められれば予算（上限50万円）が与えられる仕組み。すでに六つのプロジェクトが認められ、学生たちは事業化に向け研究・開発に励んでいる。

秋田大ものづくりセンター

工学資源学部の学生9人が取り組んでいるのが、県産酒米を使った日本酒での化粧水

作り。題して「日本酒BIN」プロジェクトだ。メンバーたちが自ら県内の産元を回り、趣旨を説明して日本酒を提供してもらった。試作品で何度もおいや肌へのべと

付き感、保湿効果などの研究を繰り返している。メンバーは「年度内に商品化への道筋を付けた」と張り切る。

「秋田は米どころ。日本酒は美容にもいいといわれている」。県出身メンバーの一言がヒントになった。6月、自主プロジェクトに認められ活動がスタートした。

「酒のにおいが強いのが課題」とメンバーたち。成分を嗅ぎずらにおいを抑えられないかと、糖の一種で消臭剤に使われるシクロロキサトリンを混ぜたり、炭やお茶を加えたりと工夫を重ねている。

使用するのは日本酒と県内のわさ水、保湿効果があるグリセリン。この二つの最適なバランスを探るため、肌の上層の水分量を数値化する機械を使い、夏休み返上で保湿状況などを調べた。

メンバーの清水祐子さん（20）は3年生。「得業は開発分野の仕事をしたが、も

めたい」と話している。自主プロジェクトでは、このほか▽自転車を使った人力発電システムによるエコ充電▽県産の牛乳や豆乳、米を使ったヨーグルトの商品化▽手形キャンパスを画面上で3D化した地図製作▽小型の模擬人工衛星やロケット製作▽秋田杉の間伐材を使った新商品

6企画で研究・開発

「商品化も夢じゃない」

開発の五つが選ばれている。

「1年間の難しさを体験している」としながらも、「自分たちで考えないとも始まらない。企業の商品企画部にいる感覚」とプロジェクトに刺激を受けている。リーダーの阿藤裕樹さん（20）は「純米酒の成分分析をした上で、さらにおい、付け心地の改善を図り、実用価値を高

くつへの難しさを体験している」としながらも、「自分たちで考えないとも始まらない。企業の商品企画部にいる感覚」とプロジェクトに刺激を受けている。リーダーの阿藤裕樹さん（20）は「純米酒の成分分析をした上で、さらにおい、付け心地

くつへの難しさを体験している」としながらも、「自分たちで考えないとも始まらない。企業の商品企画部にいる感覚」とプロジェクトに刺激を受けている。リーダーの阿藤裕樹さん（20）は「純米酒の成分分析をした上で、さらにおい、付け心地

日本酒化粧水のサンプルを手に塗り、評価し合う「日本酒BIN」プロジェクトメンバー＝秋田大

